

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和7(2025)年
1月号
通巻653号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和7年1月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷
★定価 1部 300円
★年間購読料 3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



『すさのお』最終号とその時々の『おおやまと』の表紙写真

特集『おおやまと』50年目の節目を迎えて

昭和50年1月23日に『おおやまと』第1号が、それまでの機関紙『すさのお』を改題して発行されてから50年が過ぎました。この機会に大倭での機関紙の発行や印刷などにかかわってこられた3人の方にそれぞれの思いを語っていただきました。
(編集部)

出発から50年が過ぎて

紫陽花邑 杉本 順一



思い返すと、本紙『おおやまと』の題字を法主にお願いしてから50年がたちました。それまでの題字「すさのお」と新しく書かれた題字「おおやまと」とは、

同じ法主の字とは思えませんでした。

『すさのお』に換えて『おおやまと』の題字をお願いした時のこと、法主が、元になる題字「おおやまと」を私に手渡しながら「おまえやったら、こんな字がええねんやろ」と、にっこりされたのを思い出しました。嬉しい瞬間でした。

昭和50年1月23日、本紙『おおやまと』第1号が発刊されました。それから50年の今日まで出版が途切れることなく続いたのは、まずは大倭印刷(株)の皆さん、途中には野草社の石垣雅哉さん、私が病気で倒れてからは、岸野春子さんが出版局の心柱となってくれたからです。昨年(2024)の2月9日の岸野さん急逝は出版局の危機でした。

あれから一年近く、今の『おおやまと』は、しめ縄の藁のように多くの柱が支えあってくれています。出版に携わっていたいてる皆さんを、聖歌「黎明大倭」にある昭和維新の人柱であると、法主さんならおっしゃってくださるでしょう。

宗教で立つ法主

昭和20年8月15日、太平洋戦争終結の日、大倭神宮において、法主に立教開宣の天命が下された日です。法主は次のように記しています。

《昭和二年の春、私(十七歳)は中学三年から四年に進級する時であった。四月のある朝、私の人生を左右するような重大な祖神からの霊示があった。私は驚き、否定もした。宗教で立つなんて真平であると反駁した。この時の霊示は自分が信じられない誇大妄想だったので親達にも話していなかった。それというのは……

「今から二十年たてば、天皇は地に落ち、世は乱れて光なし、人々は神意に逆らうために、天災地変が起こってくる。

この時に汝は『神ながらの法』を説いて立て。汝は神議りによって、時を見て人界に天降りたる使命の人であることを自覚せよ」

当時の人々の心の中に、こんな大戦が起こり、日本が敗けるなんておよそ想像も及ばないことだったから、私は精神分裂ではなからうか、とひそかに疑惑と恐怖を抱いたのも無理からぬことであった。もしこれが、母が受けた御神託なれば別に問題にしなかつたのであるが、自身が入神状態においての啓示だったから、当時の社会通念では門外不出の絶対他言できない内容だったので、それだけに青春の苦悶は、変わった意味において深刻だったわけである。

私は中学五年を卒業さえすれば、実業界に飛び込み、家の経済を建て直し、昔日の姿に戻すのが、親に対し、先祖に対する最善と心得ていたし、学校は商業だったから、両親も大いに期待していたのであった。そこで更に私の方向を迷わしたのが、霊界にある日蓮との初対面だった。

日蓮は先の霊示に拍車をかけてくれる。そして「行、学の二道」を勧めという。私はあくまで否認したが、とうとう抗し切れなかったのも、あれこれ考えたすえ、日蓮宗から立っているという立正大学の予科へ行くことに決めた。

何度かためらったあげく、思いきって東京へ勉強に行きたいと両親に相談した。親たちは青天の霹靂といった様相をしたが、苦しい家計であったにもかかわらず、笑って快諾してくれた。この親心が、魂の底に焼付いてからというもの、何かを究めなければと、意欲にもえて予科に入学したのである。昭和三年の四月、私は十八歳であった。敗戦の日、大倭神宮に額づいたとき、この若き日の霊示が反射的に浮かび出た。この霊示が、どうか私の妄想であればよいと、永年心の底に沈めていたのだったが、とうとう現実となった。

来るべきものがやって来た。ここで、はつきりと肚を据えて、神意を素直に全面的に受け入れる私が生まれたのである。私は、神のまにまに精進することを誓った。誓うというより、私はやらねばならない唯一の存在なんだ、やるんだ、否、やるんだ、という自覚の確立だったのである。

ところがこの日、大倭の本質的宗教としての活動は、更に二十年先であると言われた。五十五歳という年齢が頭をかすめる。法華経にある化城喻品(第七)を思い出して苦笑した

(「杉本注」横道になります、茶の間でこの時の思い出話をされたとき、「さらに二十年先と言われた、あの時は、カクンときたで」と笑っておられました。……)

《二十一年七月に宗教法人令によって大倭教は法人登記を済ませたのである。
十二月四日、かつて和の光を放った金鷄発祥の記念祭に、街頭に立って「神ながらの法」を弘宣

流布せよとの霊示があったので、明けて二十二年正月十九日、門弟数人を連れて、まず大阪の玄關口梅田駅前の雑踏の中に立った。これを手始めとして大阪各地へ日曜ごとに赴いたのである。
この年がかつての霊示から二十年目に当たっている(以上、フェイス出版『紫陽花邑』による)

出版部の始まり



ここに『大倭』創刊号のコピーが残されています。昭和23年10月4日(第1号)。(信人達の要求によって、本教機関紙『大倭』の創刊号を発行)とあります。

全体を見てみると、現在の『とおやまと』より紙面はかなり大きく全四頁、縦37cm横27cmです。1頁は8段で構成されています。

表紙タイトル『大倭』。発行所 奈良縣生駒郡富雄村中 電話富雄4番 振替大阪18874番 編輯・發行人 金泉利明 印刷人有山太郎

見出しのメモと筆者名だけ書いておきます。
1頁 神示 「黎明は訪れたり東方の光、大法は立てり大倭太加天腹」 矢追日聖。「時や到る 大倭教は立つ!!」 日聖敬白。

2頁 「街頭に觀る社會相」 宣布主任 青山次郎確(日元)。「生きる幸福を知るまで」 桑村兵祐。
3頁 中央に「聖歌くにもと」 作歌 矢追輪孺香 作曲 成川貞子。「吾は斯く信じ教育する」 金泉利明。

4頁 「東方の光」法主との問答形式文。「大

彼は「家の子集」実雄(十四才)久信(十三才)輪孺美(十二才)。「法主日聖師の日々」。

この『大倭』を出発点に、時間を追いながら出版されたものを記しておきます。

■昭和31年8月1日『大倭』(第20号まで)。

■昭和32年8月1日『大倭主義』(通算第21号)。

■昭和32年10月1日『大倭主義』(通算第22号)。



■昭和39年8月31日『大倭新聞』第1号発刊。

同時発行とあり、《住所 奈良市中町大倭編輯・發行人 矢追明月(※法主長女・輪孺美)》第2号には「大倭教の将来にたいする理想」として「幸福な家庭、明朗な社会、万国から慕われる国家、闘争なき世界等の出現を促進させる裏面的推進力となり、他面、日本宗教否凡世界宗教がこの方向に進ませるよう献身的な努力をする」とある。ここからは大倭入門2カ月の柴地則之が高校時代学校新聞の発行経験をかわれて編集発行を担っています。

彼は「編集後記」に《いまの時代は宗教団体が秋の林のきのこのように、いまを盛りと首を出す。そしてみかけにおいては毒きのこの方が、いつも立派なのである。》

こうした新聞の大抵は自分の団体の教化宣伝に努めて他の人々の意見に耳を貸そうとはしない。ここに大倭新聞が復刊するが、この新聞はこうした新聞とは反対の歩み方をする積りである。妙な言い方になるが思想の純粹培養というかドグマ化

は自己のもっている思想の生き生きとした部分を枯れさせてしまう。生物学上からいっても純粹培養よりも雑種の方が生命力にあふれている。自分と異なる思想と交流することによって自分の思想の生命力をいきいき保つことができる。いろいろな人が喋れる場所、この新聞がそういうふうを活用して頂ければありがたい。この号では特集として「日本人のふるさと」というテーマをとり上げた。現在は故郷喪失の時代で人々は何か見失っている。このテーマはこの号だけに限らず繰り返して視点を変えてとりあげてゆきたい。日本人の原点はどこにあるのか。

原点のイメージをつくり上げる操作がこの新聞でできるようにしたい」と書いています。

実は『大倭新聞』の発行を望まれた法主が、もう一つの願いを話された。大倭で放送局をつくりたいとのこと。スケールの大きい話であった。

これは形を変えて、今の『おおよまと』はインターネットで誰でも読めるところまでにはなったことに通じます。

■昭和42年8月23日発行の『大倭』の編集後記。《これまでの大倭新聞を、雑誌『大倭』として続行していきます。》

これまで「大倭新聞」は新聞というより雑誌的性格が強いという批判がありました。加えて2年前から始まった大倭印刷所が軌道にのり自分の所で印刷したら、という空気が生まれてきました。



こうした事情からこれまでの大倭新聞を雑誌に変えて大倭で

印刷し存続してゆくことになった次第です。従って新聞のつづきものなどは同じようにとりあつかってゆきます》

■これに伴い新聞形式の出版として昭和41年1月23日『すさのお』(第1号)が生まれました。ここに「法主寸言」があります。

《あなたが、信仰している大倭教は、あなたには最も有難い宗教です。あなたは救はれているのです。しっかりと続けて下さい。》

あなたが知っている多くの人々の中で、ほかの宗教を信仰している方もあるはずですが。信仰する人は誰でもあなたと同じ心であることはお分かりでせう。その同じである心と心をかたく結び合せて他宗教の人々と互いに尊敬しあい合掌の形の如く、仲むすましく自己完成の道に精進するよう努めて下さい》

『すさのお』は99号まで出しました。その編集後記に私は、《すさのお》は次に『おおよまと』として脱皮する予定です。お楽しみに」と記しました。

■昭和50年1月23日『おおよまと』1号が出ました。最初の編集テーマは「大倭三十年の流れ」でした。今年は大倭81年となりました。

本紙『おおよまと』も50歳となりましたが、法主の立教開宣以来、法主の肉声による広宣流布に始まり、出版を通しての「神ながらの法」の流布は続けられてきました。この間紫陽花邑の事業活動も様変わりしつつ今日に至っています。

昭和61年4月号に來邑した23歳の青年のことが出ています。

《『新宗教辞典』で読んだんですが、法主さんのいう「神ながらの法」というのは、どういうことなのでしょう。》

法主 そんなん、何もありません。自然の法則の

ことを言うんです。自然科学者が説明してまずね。それで、日本人の神っていうのは、上下の上っていうことなんです。例えば、子供から見たら親が上になるね。上さん上さんと上がっていくと、地球であろうと何であろうと、万物を動かしてきた根本の力がある。その根本のエネルギーが最高の神さんです。そこから派生して、いろいろに変化して、人間もできてるんだから、その根本のエネルギーが大神さんですね」

平成8年2月9日。法主が御帰幽されるまで、こんな疑問や問答を、法主にぶつけてきた編集部でありました。

最晩年の法主が「わし誰にも言うてないことがあるねん」と聞いた杉本志津女は何のことか分らなかったらしいです。

御帰幽されてから平成24年まで瑞光院の書齋はそのままでしたが、思い切って整理にとりかかりました。最上部を物受け用に設計された大きな古い本棚を整理作業の最期にしてみました。そこで誰も見たことない「神通力如是」が発見されました。

その前文の最後は「日日ノ御宣託ヲ録シ後世ニ遺サムトス」でした。

遺されたテーマが舞い降りたわけです。このテーマ(御宣託)を、どう受け止めるか。『とおやまと』に、このことをどう示していけばいいのか。出版局の責任は重い。

令和元年5月号から「神通力如是」と題して2ヶ月に1回のペースで記事を出していくことになりました。今月号の『とおやまと』には「神通力如是 第34回」を載せていますが、「神通力如是」の中では、時代を超越した霊界人達が、矢追妙月の身を借りて現界人(主に法主)と交流しています。

それぞれの霊界人達は自分が現界に在った時の己の思いを妙月の身を通して、伝えてきます。

この御宣託の行われた日々には、現界に在った人々も、それぞれの転生をくりかえしてきたその時代時代の各人の言い分を自己主張してきます。

頭幽不二の世界は実に複雑に絡みあっています。数々の霊界人達の言い分を、法主は一つ一つを理解しつつ、事を進めています。そこに法主の神通力の一端を感じることが出来るのです。

『とおやまと』発刊50周年に思うこと

紫陽花色 青山 法義



『とおやまと』発刊50周年に向けて書くようにと依頼があり、何を書くかずいぶん考えました。考えていると私が大倭印刷で仕事を始めた頃のことや、『とお

やまと』の前身『すさのお』を教修会に間に合わせるよう印刷機を回していたことを思い出しました。その頃はまだ活字を拾って版を組んでいた時代です。原稿も遅れがちで、発行も遅れることがありました。あれから52年、今も大倭印刷で仕事をさせてもらっています。

『すさのお』から『とおやまと』に変わって毎月23日に発行されるようになり、大倭印刷としても必ず間に合わせるため予定を組み、発行できるよう協力してくれています。

話は少し変わりますが、いつごろかは定かでないですが、お正月のお餅付きの日、法主様がコンパクトカメラを持って瑞光院から降りてこられたので挨拶をすると、「のん(私のこと)、今はカメラもこんなに小さくなってらくなった。昔は大きくて重かった。大倭ではご飯も満足に食べれ

ないときでも、写真を撮ってん。おかちゃん(鈴木母さん)は米の一升でも買って欲しいとおもったと思うよ。でもな記録は大事ななや、その時はその瞬間しかないからな」と。また法主さんの晩年、「原稿ができたけど取りに来てくれるか」と印刷に電話が入り、瑞光院に預かりに行くこと、今はこうして、わしが書いたものをそのまま文字にして伝えることができるし、また話しておいたものも文字にして伝えてくれる。お釈迦さんの時代は文字もなかったから難しかったと思う。だから(中島)健に印刷を始めるように言ったんや」と、写真や文字で残した記録の大切さを教えてもらいました。

写真の記録については井手泉さんがいつも東光大祭や日聖祭など必要な時には撮影してくれました。井手さんがだんだん歩くことが難しくなられた時に「法義さん、私はもう動くのがたいそうになり、写真を撮るのは難しくなってきたので、これからは法義さんに撮影をお願いできませんか」と声をかけられました。先ほど書いたように、記録の大切さは法主さんから教えてもらっていたので、「わかりました」と返事をさせていただきました。できる範囲で撮影するようにしています。それと同じような時期に、岸野さんから『とおやまと』の編集部もね、高齢化が進んでいて、少しでも若い人に手伝ってもらいたいよ。のっちゃん編集会議に顔を出すようにしてくれない」と声をかけてもらい、参加するようになりました。しかし日常に追われだんだん休むことが増え、参加できなくなっていました。それでも毎回編集会議の日程と掲載する内容の資料は届けてくれました。そして突然昨年2月9日に岸野さんが帰幽されました。これを機に岸野さんから、印刷のこともあるので、編集会議に顔を出してくれませんか

声がかかり、約10年ぶりに編集会議に参加するようになりまし。自分では何もできないのですが、大倭印刷の社員さんや、法主さんのテープ起こし、まとめをしてくださる方、また最後の校正など、多くのご協力があり毎月発行できています。

現在『おおやまと』は紙媒体での発行を中心に、インターネットでも過去5年分ぐらいは見れるようになっていきます。これからの時代を考えると、インターネット媒体を通して、ユーチューブやインスタグラムなどの動画サイトを活用して法主様の肉声や映像を見ていただけるようになるというなど思っています。これを実現するためには、まだまだ多くの方の協力が必要です。

一方で今の時代SNSなどで簡単に人の批判をしたり、フェイクニュースを流したりすることは簡単にできる時代になっています。法主様の伝えたいことを真つすぐに伝えるためには乗り越えなければならぬことがたくさんあります。

法主様が昭和の時代に、編集部座談会で「大倭で放送局を作ったらいねん」という言葉も残しておられました。インターネット上で『おおやまと』を読んでもらうのも広い意味での放送局だと思えます。法主様が残された言葉を、時代に合った方法で伝えていく協力が出来ればと思っています。

これからの法主さんが残された貴重な資料を、後世に残していくために、今生きている人たちの協力を得て『おおやまと』の発行が続いていくものと思えますので、お声がかかった場合はご協力をお願いいたします。

大倭印刷とつとむに

紫陽花邑 中島 健

私が中学を卒業する少し前に、法主さんから瑞



光庵に来るように言われまし。何事かと思つて行つてみると、「お前は将来何をしたいのか」と尋ねられまし。私は即座に「機械が好きなので、機械を使つて

商売するようなことをしたい」と答えまし。

一週間ほどしてから再び呼ばれて「大倭でも将来は印刷所が必要だと思つるので、昼間は印刷屋で印刷について学び、夜は高校で勉強する」というのは、「どうや」と法主さんから聞かれまし。一も二もなく「わかりまし」と返事をし、卒業後は奈良市市会議員の松本伍史さんが紹介してくれた奈良市内の南都印刷で仕事をし、夜は奈良商工業高等学校へ通うことになりました。昭和32年の春のことでした。

夜間高校から帰ると夜の10時近くになつてしまふのですが、一時期夕食を瑞光庵で食べるようにと言われ、法主さんと語り合いながら食事をしたのはいい思い出です。

南都印刷では、4年間で解版や文選、印刷、製本など一通りのことを経験し、高校を卒業してからも「御礼奉公」のような形で1年間は営業の仕事をやらせてもらいまし。

昭和33年末には中古の小型印刷機と活字を大倭で購入し、まだ在学中だったのですが、あちこちに注文をとつて名刺やはがきなどの印刷を手がけることになりました。法主さんが「お前が版を組み立てたら、わしが刷つておくら」と言つてくれたことがありまし。法主さんには印刷機の使い方について何の説明もしていなかつたのに、きちんと刷り上げてくれたのが、今でも不思議だと思つていまし。

大倭では昭和33年7月に大倭金属工業所を創業

していて、義父の青山日元や弟の中島康治などがプレス加工の仕事を始めていまし。南都印刷を退職してからは、その営業の仕事にかかりまし。金属プレスの製品は他社にはない工夫があつて評判がよく、売上げも順調に伸びて、大倭もようやく経済的なゆとりが始めていまし。

ところが、プレスの作業中に何人かが機械に指を挟まれて切断するような事故が発生してしましまし。それを見た法主さんが、プレスの仕事自体をやめるように指示したのです。この仕事によって経済的に上向きになつてきていた時だけに、この決断には驚かされまし。

この間、大倭では大倭安宿苑の救護施設の増築やコンクリートブロック工場の開始、FIWC関西委員会による交流の家建設運動の展開などさまざまな動きがありまし。昭和39年秋には念願の印刷工場敷地の造成工事が始まりまし。そして翌年の10月には、とうとう大倭大本宮事業部の大倭印刷が発足されまし。

それまで大倭で発行されていた『大倭』、『大倭主義』、『大倭新聞』などの機関紙は、いずれも外部の印刷所で作られていまし。昭和41年1月に創刊された『すさのお』や昭和42年8月に雑誌の形で創刊された『大倭』は大倭印刷で印刷されたものです。さらに昭和41年12月には、大倭印刷初の印刷・製本による本格的な書籍である杉山龍丸著『印度を歩いて』を納品することができ感慨深いものがありまし。

今ふり返つてみると、法主さんの一言だけを出発点にして、遠大な舞台の中で渦にもまれながら生きてきたという感が強いのです。法主さんが語つていた「必要とするものは、必要とする時がくれば、求めずとも与えられる」という言葉は、自分の経験に照らしてみても本当にその通りだと思

います。

私が20歳の時に瑞光院で靈動を起こし「私は大

倭の礎になります」と叫んでしまったのを今でも覚えていますが、法主さんに出会って救ってもら

ったとつくづく思います。(談)

じんずうりきによぜ

「神通力如是」の真意をさぐる

第三十四回

大倭教の源流にさかのぼって

原文

十一月二十七日 午前七時於鳥見庄山
太陽ヲ拝セル時。
天津皇祖御歌

アサミドリ澄ミ渡リタル大空ニ吾レ世
ニ出ルコノ姿、コレゾ芽出度キ極ナリ。
コレゾ芽出度キ極ナリ。

雲晴レテ吾レ出ム。四方ニ光ハアマネ
ク照シ、萬物草木ニ至ルマデコノ御恵ヲ
ウクルハ此レ末法ノ代ノ事ヲ示スナリ。
「日蓮^{日蓮}ヨ、オワカリニナツタカヤ」題目。

「饒速日命。
吾レヲ世ニ出シクレシ君^{日聖}ノ為、悪魔
ハラヒニミソバニオリ、吾レ恩返シヲナ
シクレム」

大倭、登比能毛利遙拝ノ時。
倭姫、挨拶、神楽。

「君ノ為、國ノ為命ヲ捨ツルハ國タミノ
ナス可キ道デアルゾカシ。君ノ為、國ノ
為吾レ世ニ出テ命ナゲ出シ其ノ為ニ吾レ

果ツル身ナレバ此上モナキ悦ゾ。コノ上
モナキ悦ゾ。題目」 倭姫挨拶。

「吾レハ、第一代箭負道麻呂。

五十代^③ノ麻呂ニ告グ。汝コノ世ニ出デ、
代ノ立直シナサム役目、何卒御願奉ル。
吾レ古ヘハ太子ニ供シ物部ヲ追討ニ参リ
シ時、大倭日高見國鷄杜ニ詣リ矢ヲ八本
頂キシナリ。其ノ矢ヲ背ニ負ヒ追討ニ向
フ。其ノタメ箭負ノ姓ヲイタダキシナリ。
箭負(矢追)家ノ人々ハ古ヘヨリコノ大
倭日高見國鷄杜ヲ守リ致セシ者ナリ。如
何ニハタカラ悪魔ノ働キ為サウトモ恐ル
ルナカレ。汝ノ心ハ眞ノ水晶ノ如ク澄ミ
オルゾ。吾レ頼ミトスルハ汝一人ナリ。
ヨクヨクコノ旨體シ吾ガ使命ニ身ヲ捧ゲ
玉ヘ道麻呂ヨリ御願申ス。吾レコノ山ニ
在ツテ汝ヲ守リ申サム。案ジルナカレ五
十代ノ麻呂日聖ドノ」

註釈

①恩返シヲ

「神通力如是」第33回の原文のなかで饒速日

の言葉として「汝ノ御恩カヘシニ子トシテ生レ
出デ、ナンジノ悪魔災難吾ニ受ケム」とある。
また、今回の「神通力如是」第34回でも、饒速
日命の言葉として「吾ヲ世ニ出シクレシ君ノ為、
悪魔ハラヒニミソバニオリ、吾恩返シヲナシク
レム」と強い調子で話しておられる。
「子供として生まれての恩返しとは」どうい
うことだろうか？

法主自筆の戒名メモがあり、その中に「昭和
一八年六月十五日 帰幽日 妙紀嬰女(紀代
始)」とある。紀代始は「キヨシ」と読む。法
主の三女にあたる。みどりご。
つまりこの紀代始さんこそ饒速日^{にぎはやくひ}が転生してい
たことになる。

②第一代箭負道麻呂

法主は矢追家第一代の箭負道麻呂について次
のように記している。

《矢追はもと箭負^{やうひ}といひ、聖徳太子二歳の時よ
り内舍人^{うちわたり}即ち扶育官^{ふいくわん}だった道麻呂が物部守屋討
伐の折、大倭神宮(矢追の氏神)に戦勝祈願を
執り行つた時、神より授かりし鎬矢^{かきや}を背負つて
守屋を射殺したので、時の人が箭負の道麻呂と
呼び、以来これが姓となつて後世まで伝わつた。
現河内の八尾の地名は、箭負が河内一國を賜つ
てここに住まつたことよつて起こつたもので
ある》(『やわらぎの黙示』75頁より)

③五十代ノ麻呂

矢追家50代の家系図を法主はメモのような形で残していて、その家系図によっても日聖法主50代目として記されている。左下方の図は法主のメモを矢追房子さんが清書したものである。

④コノ山

「神通力如是」の神話の舞台であった庄山の矢追家の邸宅のある、富雄川側から見ると高く見える場所のこと。

現代語訳

十一月二十七日 午前七時鳥見庄山において。太陽を拝せる時。

天津皇祖 (奇稲田姫命) の御歌

浅緑色に澄み渡りたる大空に、私が世にあらわれるこの姿、これこそがめでたい極みなのです。これこそがめでたい極みなのです。

雲は晴れて 私は出ていきます。四方にも光は遍く照らし、万物草木に至るまでこの御恵を受けるこのことが末法の代の事を示すのです。「日蓮よ、おわかりいただけましたか」題目。

饒速日命 「私を世に出してくれたあなたのため、悪魔払いのためにあなたの側にいて、私は恩返しをいたしますよ」

大倭、鶏杜を遙拝の時。

倭姫、挨拶、神楽。

倭姫 「天皇のため、国のために命を捨てるのは国民のなすべき道なのです。天皇のため、国のために私が世に出て命を投げ出し、そのために私が命を終える身であればこの上もない喜びです。この上もない喜びです。題目」倭姫挨拶。

箭負道麻呂 「私は第一の箭負道麻呂です。

五十代の麻呂(日聖)に申し上げます。あなたはこの世に出て、世の立直しをされる役目です。どうぞお願いいたします。私は昔は聖徳太子のお

供をし物部守屋を追討に行く時、大倭日高見国鶏杜に詣り矢を八本頂きました。その矢を背負って追討に向かいました。そのため箭負の姓を頂いていたのです。(矢追) 家の人々は昔からこの大倭日高見の国鶏杜を守ってきた方々です。どのようにはないのです。あなたの心は真の水晶のように澄み切っています。あなたが頼りとするのはあなた一人です。よくよくこのことを心にとめて自分の使命に身を捧げてください。道麻呂よりお願いいたします。私はこの山にいてあなたを守りましょう。心配はいりません、五十代の麻呂である日聖殿」

「あさみどり」について私観

〈実感〉天津皇祖御歌「アサミドリ澄ミ渡リタル大空」

令和6年11月5日、早朝6時4分、眠れず起き出し、東の空を見ると朝焼け。しばらく見とれていたら、次第に空は青みを帯び、朝焼けは遠くの雲にもかかる。空の青は広く広がっていく。東の山々のすぐ上は一層の雲がおおっている。その雲も赤くなるが太陽はまだ顔を出さない。6時25分頃、高い空は空色の明るいブルーだが、下方は青が薄くなり出し多少緑がかってくる。

「あさみどり」、その言葉の意味する色と初めて出会えた。太陽が出現する直前のその色。長年の疑問がとける。6時半頃、太陽が顔を出す。雲の間に神々しい御姿がはっきりとあらわれ出し、6時35分、その全体をあらわす。鳥は飛びかい、人は動き出す。ありがたい。雲をかきわけ、現われる太陽。

その手前、空を走っていた黒雲は、やがて消えていった。

※

右の文は令和6年11月5日早朝、「神通力如是」とは直接の関係もなく書き留めた雑文なのだが、今回第34回の「神通力如是」の現代語訳を試みていた時、冒頭に奇稲田姫の御歌として「アサミドリ澄ミ渡リタル大空……」の一文が出てきた。

「アサミドリ」については、すでに昨年5月号に辞書の言葉として「薄緑色」(福武書店『福武古語辞典』、「空色」(岩波書店『広辞苑』)の語句の表記がある。しかし「神通力如是」に幾度かあらわれる「アサミドリ」には何か辞書的な説明だけでは釈然としないものが現代語訳を試みる度であった。今回、11月5日早朝の出来事で長年の疑問が私なりに氷解した。太陽の出現する直前の疑問

一、道隆(一)	正家(三)	孝義(四)	宗康(五)	義賢(元明)
二、重光(二)	家隆(七)	宗持(九)	宗祐(十)	秀朝(清和)
三、重光(二)	義正(三)	正孝(四)	忠重(五)	隆繼(後醍醐)
四、忠秀(七)	正行(八)	義高(九)	忠義(十)	信孝(後醍醐)
五、利祐(三)	義貞(三)	宗盛(四)	宗敏(五)	隆茂(安徳)
六、道昌(三)	道行(三)	宗朝(三)	家光(三)	武彦(後醍醐)
七、利政(三)	宗繁(三)	家盛(三)	宗尊(三)	宗彦(後醍醐)
八、隆教(三)	隆治(三)	隆榮(三)	親徳(三)	宗助(正徳)
九、宗時(三)	宗司(三)	宗業(三)	宗四(三)	宗兵衛(後醍醐)
十、宗光(三)	宗明(三)	宗治(三)	宗大(三)	宗隆(後醍醐)
十一、宗光(三)	宗明(三)	宗治(三)	宗大(三)	宗隆(後醍醐)
十二、宗光(三)	宗明(三)	宗治(三)	宗大(三)	宗隆(後醍醐)

手前、矢追房子書

あふれる清やかな色が「あさみどり」なのだと思う。つまり天津皇祖(奇稲田姫)の出現によって末法の代が終わりを告げ、万物すべてが恩恵を受けるその直前が現今なのだということである。

以上、「あさみどり」に関する私観を述べてみた。(林 修三)

あじさい日記

12月8日 午前8時から大倭墓地の大掃除。午前9時から大倭紫陽花邑の大掃除。お天気に恵まれ80人以上の方々のご努力により、日聖祭を気持ちよく迎えることが出来ます。

12月9日 紫陽花邑の隣町藤ノ木台の背山神社の整備が行われました。

12月13日 この日から大倭神宮・大倭大宮拝殿前・大倭安宿苑の三ヶ所に飾る門松作りを邑の山崎正知さんが始められました。



12月15日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

12月21日 教長さんや山崎正知さんらにより新しいしめ縄の飾りつけも始まりました。

12月22日 午前10時頃より翌日の日聖祭(大倭元旦)のため大倭大宮拝殿の金屏風や正月花などが飾られました。

12月23日 午後1時半から法主

奥津城にて日聖祭始まりのご挨拶。午後2時から大倭大宮拝殿において日聖祭。

この日は平成2年12月23日の法主映像の法話が放映され、そのあと祭主矢追家麻呂さん、社会福祉法人大倭安宿苑の常務矢追明昌さん、大倭会会長の岸田哲さんの挨拶。続いて紫陽花邑の四か所の守護霊への日頃の感謝のための挨拶回りが行われました。祭典終了後は、大倭会館で日頃交流の少ない方たちが集まって歓談されました。

12月24日 午後5時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。

12月27日〜30日 交流の家で年末キャンプを開催。関東や九州の学生を中心に報告会やディスカッションなどを行いました。

12月29日 午前9時から大倭神宮の令和6年の年末大掃除が行われました。

12月31日 午前10時から邑の男たち四人が大倭大宮拝殿と大倭神宮の正月用お供え物の飾りつけをしました。

午後11時45分から、大倭大宮拝殿

の大大鼓を、ひと月を一回として破い清めの太鼓を十二回打たれました。

1月1日 午後2時から大倭神宮の年始祭が行われました。

1月6日 午前11時から大倭拝殿において紫陽花邑の事業関係の各責任者たちの新年挨拶がありました。

午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

午後6時から教長矢追家麻呂さん主催の新年食事が大倭会館で行われました。

法主帰幽祭のご案内

日時 令和7年2月9日(日曜日)

●午後1時45分より法主様奥津城(ちづき)においてご挨拶をいたします。

●午後2時より大倭神宮においてお参り後法話などの映像記録を見ていただき、その後教長さんのお言葉をいただきます。

●密集・密接を避けるご配慮をどうぞよろしくお願いたします。

宗教法人 大倭教

大倭安宿苑では12月18日 奈良県社会福祉大会が橿原文化会館にて開催されました。永年勤続表彰では県社協会長表彰5名、県知事表彰1名でした。

(菅原園)
12月25日 年忘れ会の昼食はクリスマスメニュー。午後からフロア対抗のカラオケ大会で楽しみました。その後クリスマスケーキを頂きました。

1月2日 午後から書初めを行いました。どんな文字を書こうかなどいろいろな話しながら楽しい時間を過ごしました。

(須加宮寮)
12月24日 昼食時、忘年会を行いました。クリスマスカードとプレゼントを座席に置き、皆さんプレゼントがタオルと分かるようにすぐに開封されていました。

1月1日 昼食時に、お節料理を頂きました。例年であれば、大倭神宮へ初詣に行くのですが、インフルエンザ流行に伴い中止。午後から、福笑いやすごろく・おみくじ等を行いました。

1月2日 午後から日常活動室にて書初めを行いました。「お正月」や「寿」等を書きました。(長曾根寮)

12月21日(特養)フロアにてサントアの衣装を着て、音楽を流しながらクリスマスケーキを食べました。

12月23日(デイ)クリスマス会

で、1年間の思い出写真をDVDにした映像を鑑賞しました。(茂毛啓園)

12月24日 クリスマスでサンタに変装した職員がクリスマスプレゼントを渡しました。そして、記念写真を撮影しクリスマスのお囃子を味わいました。

あんない

*玉緒祭(大本宮)

2月2日(日) 午後2時より大倭大宮拝殿にて。

玉緒祭は宇宙根本神霊と人間の本霊との結びを感謝するお祭り。玉は命を、緒はひもを言う。

*月次祭(大倭神宮)

2月6日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

*法主帰幽祭

2月9日(日) 上欄参照。

*大倭会視会

2月9日 この日は法主帰幽祭のため視会は中止とさせていただきます。

*月次祭(大倭神宮)

2月15日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

*申孝祭と月次祭(大本宮)

2月23日(祝・日) 午後1時20分より大倭神宮にて申孝祭が、午後2時より大倭大宮拝殿にて月次祭が行われます。

申孝祭は、神武天皇が行った祭政一致の故事、鳥見山中の霊時を記念するお祭りです。